

嫁〈よめ〉が淵〈ふち〉（三田市・下井沢）

むかし、この地にそれはそれは、仲むつまじい夫婦〈ふうふ〉がありました。

ところが、姑〈しゅとめ〉さんは、朝から晩まで嫁いじめばかりしていました。村の人々が、お嫁さんをほめれば、ほめるほど、お嫁さんにつらくあたるのでした。でもお嫁さんは、じっとこらえて姑さんを大事に大事にしていたのでした。

それは、ある年の田植え時のことでした。

姑は、武庫川と、青野川の合流する所の大きな田の田植えを、お嫁さん一人に植えてくるようにめいじました。

お嫁さんは、いわれるままに気持ちよく田植えに出かけました。

ところが、この田は村一番の大きな田です。朝から休む間もなく、せっせと田を植えていきました。

植えても、植えても田は植え終わりません。股〈また〉からみる後の方の広いこと、お昼もそこそこにして植えていきました。

植えていくほど田は広くなるように思えるのです。

お嫁さんは、だんだんあせて来ました。せめて日のあるうちにと、力いっぱいがんばりました。

けれど、それはだめでした。

もう、日はとっくに西の山に沈んでしまいました。お嫁さんは、何となく淋〈さび〉しくなり悲しくなってきました。この田を植えて帰らないと、またどんなに姑さんにいじめられるかわかりません。

あたりは真暗になり、かえるが物かなしげに時々鳴いています。

お嫁さんは、とうとう泣き出してしまいました。

急に仕事をやめると、何を思ったのかたおれるようにしながら、川へさしていきました。

その川は、梅雨〈つゆ〉で水かさが増〈ま〉してごうごうと流れていました。

お嫁さんは、やにわに淵の上にある大きな岩の上に立ち上がりました。涙〈なみだ〉は次から次へと流れでてきます。静かに手を合わせると目をとじました。

「ザブン」

と大きな水音がしたかと思うと、もう岩の上にお嫁さんの姿はありませんでした。

村の人びとはこれを知って、岩の上にほこらを建てお嫁さんの霊〈れい〉をなぐさめました。

だれいうとなくこの淵を、「嫁が淵」と呼ぶようになりました。

